


『おやじバンドコンテスト THE FINAL』出演希望申込書

※申込書にご記入のうえ、下記の宛先まで郵送、または直接お持ちください。 ※事前審査がありますので、CD、MD、DVD のいずれかを同封してください。

バンド名		写真貼付欄		
ふりがな	代表者 生年月日	 <p>※必ず全員が写った写真をお願いします。 ※貼付が不可能な場合は、同封あるいは添付でも構いません</p>		
代表者 氏名	年 月 日 (歳)			
ふりがな				
代表者 住所	〒			
代表者 電話番号 あるいは 携帯番号	代表者 E-Mail 携帯メール			
バンドメンバー	氏名	担当パート (使用機材)	生年月日	【演奏曲目①】
	①	()	年 月 日 (歳)	(演奏時間 約 分) ※コピー曲の場合はバンド名もお書きください
	②	()	年 月 日 (歳)	
	③	()	年 月 日 (歳)	
	④	()	年 月 日 (歳)	【演奏曲目②】
	⑤	()	年 月 日 (歳)	(演奏時間 約 分) ※コピー曲の場合はバンド名もお書きください
	⑥	()	年 月 日 (歳)	
持ち込む機材があればご記入ください (こちらで用意できる機材…ドラム、ピアノ、アンプ【ギター用・ベース用・キーボード用 ※ただし、共通となります】)				【予定集客人数】
プロフィール (舞台などの経験がある方はお書きください)		応募の動機や、この『おやじバンドコンテスト THE FINAL』に期待することなど、ご自由にお書きください		
				人

〒311-3423 茨城県小美玉市小川225番地 小川文化センター(アピオス)『おやじバンドコンテスト THE FINAL』出演者募集係
TEL:0299-58-0921 FAX:0299-58-0923 (受付時間9:00~17:15) 休館日:月曜日

apios mini column vol.02 「おやじバンドコンテスト」物語 『おやじの復権が幸せを呼ぶ』



地

震・雷・火事・親父。世の中では怖いもの代名詞とされている。親父が怖い？オレにとっては怖くもなんともなかった。オレの親父はごくごく普通の親父。普通のサラリーマンで、酒もタバコもやらない。自分で働いて稼いだ給料は母のもの。母からもらって存在だけで暮らした。高校生になっても小くつまらない仲間たちから一緒にバンドやらないかと誘われていた。もともと興味があったオレは、バイトをして貯めたお金でギターを買った。部屋で練習していても、親父はうるさいともなんとも言わない。最近ハイドロホンとタンゴで練習するようになった。練習後はファミレスでくたらない話で盛り上がるのが定番。帰る時間が遅くなるのも当たり前。けど、親父はいつも通リ帰宅時間が遅かったある日、「おかえり。ちよつといいか？めずらしく親父に呼び止められた。リビングで向かい合う親父とオレ。こうやって面と向かって話すのはいつぶりだろうか。かなり久しぶりだ。怒られるのかとそれなりの覚悟をしていたが、そういう雰囲気でもない。バンド、楽しいか？「ああ。まあ、これ、親に来ないか？親父が子でつみたいなものを渡してきた。『おやじバンド？』「出場するんだ。『誰か？』「私が。た。『ああ？冗談だろ？』「いや。親父、バンドやってたの？」「ああ。オレはでかいホールだろ。あのステージで親父が？。整理券を見つめながら自問自答している。いつのまにか親父の姿はなかった。本音言。オレはアピオスだ。ここで親父が演奏するなんて、いまだに信じられなかった。司会者のタイトルコールで幕が上がると、きらびやかな照明がおやじたちを照らす。「たかおやじさんたちのバンドだろ。」となめていたオレの心を打ち砕く。おやじたちの勇姿に見とれていると、大きなスクリーンに親父の姿が映し出された。女性司会者が親父のバンドの紹介を始め、もう一人の男性司会者が客席まで降りてきて応援団を煽る。オレは隠れてやりすごそうとしたが、司会者は若いオレを見逃さなかった。「今日はどなたの応援ですか？」「親父です。」そう答えると怒涛の質問攻め。「この企画が『おやじの復権』だけあつて、かつこの目的だった。そこから始まりました。何を答えたかはよく覚えていない。いつのまにか親父たちの演奏が始まっていた。楽器をかきはじめたオレには分かる。めちゃくちゃうまい。そして、かっこいい。あつという間の2曲。終始見とれていた。親父の出演が終わった。帰ろうと思っていたが、席を立たなかった。親父に一言だけ言いたかった。親父のバンドは憎しくもクランプリは逃した。が、優秀賞を獲得。公演終了後のお客様見送りのとき、オレは親父のもとへ向かった。「...。面と向かうと恥ずかしくて言葉が出ない。そんなオレを気遣い、親父のほうから話しかけてくれた。「来てくれてたんだ。『ああ。』「今度小さなライブハウスだけで出演するんだ。お前も一緒に出てみるか？」「ははは。気分がのればな。そう言ったらオレは逃げるように親父の前から立ち去った。親父の姿がいつもより大きく見えたと同時に、なんだか一言、機会があったら言おう。『親父、かつてよかったぜ』。※この物語はフィクションです。